

領の親善受理を強硬に主張し結局、浦賀近くの久里浜で幕府に受け取らせました。その際、翌年春の再来を予告して香港方面へ退去しています。

幕府の困惑とペリーの再来航

その後、老中首座の阿部伊勢守は攘夷派である水戸藩の徳川斉昭公を幕閣に加え、国論の統一を図ろうとしましたが、これは成りませんでした。

しかし、翌年1月16日のペリー再来航時には約48万人の兵力で江戸湾の防備を固め、交渉の成行き次第では一戦を交えるという意志を鮮明に現しています。また、ペリーと折衝にあたった幕府きっての論客、^{だいがくのかみ}林大学頭も巧みな外交姿勢を見せています。

日米和親条約の締結

結局下田、函館の2港の開港を含む日米和親条約(神奈川条約)を3月3日に締結したのですが、ペリーはこの交渉過程で得た感触から、当初考えていた通商条約の締結交渉を後年に回すべきであるとの決断を下しています。

老中阿部伊勢守をはじめ、幕閣が海外情勢も踏まえながら予測していた交渉結果はどのようなものだったのかは分かりませんが、ペリーの主張も全てが通ったわけではありませんでした。

アメリカへの帰国

ペリーは日米和親条約の締結後、下田で日米和親条約付則13ヶ条に調印しました。さらに、函館へ赴き測量などの諸調査や視察を行い、琉球に回航して那覇条約を結んでいます。そして、香港からは艦隊と別れ、陸路インド経由でヨーロッパを経て、1855

年の1月11日にイギリス船で帰国しました。

アメリカ国内の変化と『日本遠征記』の刊行

その頃のアメリカは、大統領がフィルモアからフランクリン・ピアス第14代大統領に代わり、世論は対外問題よりも南北戦争に向けた国内問題が重視されるようになっていました。

こうした中で、議会からの要請を受けたフランシス・ホークス牧師が、公式報告書『日本遠征記』(正式には、『シナ近海および日本遠征記』)の編纂を行い、ペリーはこの監修にあたりました。そして、報告書が完成した3ヶ月後の1858年3月4日、ペリーは心臓発作のため63歳で帰らぬ人となりました。

市井の研究者の業績

ペリーの来航は、わが国にとってまさに「非常事態」でありましたが、民衆の一部にはこの推移を冷静に、また注意深く見つづけていた人たちがいました。その人たちは公の組織に属していなくても、いろいろな方法で情報を集め、ペリーや幕府の動きを丹念な記録に纏めています。

今回の展示会では、上記の流れに沿ってペリーに関するアメリカ側の資料と、わが国の「市井の研究者」の残した業績を中心にして出展いたします。この、ささやかな展示会からペリーの考えと幕府の対応の一端を確認していただければ嬉しく存じます。

前ページのペリー提督の写真は、W・E・Griffisによる“Matthew Calbraith Perry”(Boston, 1887)より転載したものです。

おく まさよし(事務長兼管理運営課長・司書)

ペリー提督来航
150周年記念
稀覯書展示会

『ペリーがやってきた！ 黒船来航と日本』

と き：平成15年6月3日(火)～6月9日(月) 午前10時～午後6時(日曜開館)

と ころ：京都外国語大学国際交流会館7階インターナショナルホール

主 催：京都外国語大学付属図書館・京都外国語短期大学付属図書館

